

キラリ

人

「駅サポーター」として14年間、目時駅を暖め続けて

川上 弘志さん

「皆さんに目時駅を、心地よく利用してもらいたい」

目時字中道在住の川上弘志さん（85）は、平成19年に青い森鉄道㈱から無人駅である目時駅の管理を委託され、「駅サポーター」として同駅の環境整備に務めてきました。令和2年度で「駅サポーター」制度が終了し、駅ストーブも撤去されるため、令和3年3月26日をもって14年間にわたる任期を全うしました。「自分は駅長の代わりだと思いつつ、皆さんに心地よく駅を使ってもらうために、日々頑張ってきた」と川上さんは今までの業務を振り返りました。

駅サポーターは、駅内（待合室、ホーム、トイレなど）の清掃や、設備に異常があった場合、青い森鉄道への報告業務などを担っています。冬の時期には、待合室に設置しているストーブの点火や、ホームの雪かきなども行っていました。通学で電車を利用する高校生や駅前からスクールバスに乗る小学生は、早朝から駅の待合室を利用しています。寒さの厳しい冬は、川上さんのつけるストーブが子どもたちの心と体を暖めてきました。川上さんは「子どもたちに少しでも快適な時間を過ごしてほしかった。暖かそうにしている子どもたちを見ると嬉しくなったな」と目を細めました。

70歳のときに建設業の仕事をやめてから駅サポーターへ就任した川上さんは、同時期に新聞配達も始めました。川上さんの一日は、午前4時の新聞

配達から始まります。「毎日、早起きするのは大変だったけれど、早朝から活動している地元の人たちを見ながら、楽しく配達していたよ」と頬を緩めました。

新聞配達が終わると、次は駅サポーターの活動です。「午前6時台の電車に乗る子もいるので」と足早に目時駅を目指す川上さん。待合室のストーブに火をともし、子どもたちを待ちます。待合室で仕事をしていると、散歩している地元の人たちが遊びに来ます。「遊びに来た人たちと語り合った日々は楽しかったなあ。毎日会えなくなると思うと寂しい」と川上さんは感慨にふけりました。

電車の発車寸前で子どもが駅に駆け込んできたときは、ドアを開いてくれたり、雪で電車が運休になったとき、二戸市の高校まで生徒を送ってあげたこともありました。利用者のことを常に気にかけている川上さんは、無人駅である目時駅の駅長のような存在となっていました。駅サポーターを退任した現在も「駅を利用する子どもたちの様子を見に行こうと思う」と笑顔で語りました。

「駅サポーター」として目時駅を利用する子どもたちを、長年見守ってきた川上さん。待合室を暖めてきたストーブのように、子どもたちの心にも、温かい思い出と感謝の気持ちがいっまでも残っていることでしょう。



ストーブ最後の点火の日、川上さんに感謝を込めて花を渡す西野想千君（9歳）